春情恋の葉ゑの初編 中

へ15
2937
2

へ13
2937
2

春色戀廼染分解中之巻

江戸　朧月亭有人著

第三回

犬たゝの縣ゐ8ゐのハゞ長の裏ト古人の吟の迄ゝゝで
犬も歩めバ棒ニやらゝ爰ゐ伊達屋の後家お柳ハ
元来多情のさゞゐゐるゐ迄ゐ分ゐく文年弱一人
森かゝゐ打ゝゝゐ彼書生の八義ゲ奥の客い分
ゝゝゐ用ゝゝゝ情弱ゝゝゝ土ハ下地ゐ

はし情商人拙女ふさ人臨八王臨ある八義史かゝる
毒婦の夫人臨もまさるあたるゆゑ男ひ羽や警警の
勢りとありてより伊達やの家紙押願せんとおの人
めうゝ知よかくふよ伊家支婦ゞ彩ヲよあり追ゞ
さん矢ぞもゞゆとおの人扨ゝ服日のお侯伊ゝ公も
いそくと是紙ゞしてかゝゝてと服玉ぞちゝ猶簇
菊扨ゝ例の歌ゝ杖杖をカふきまゝゝ眼あゞらく
盗ねと見世先で挨拶ゝ口奥人ゝ浪家のゝ柳よ

うち向ひ 教 一生懸へつひゝく不沙汰ゆゑ好きゝ平
迷ゝぐゝ中さねばゝゝ主人ふ伊家どの代頂世
ゝの俳判よ柳川家のゆゑとゝ人頃ゆようゝをゆし
ゝ居り間よゝへ行衆も居ねよゝ居ねのゝゝら猶
弟よ猥紙をゝくゝとゝゝれゝたゝ今達
くゆかゝ家へゞ人好ゆ川さふ伊家どの八文留るゝナ
柳 茂程ゆゝみもゞゝませぬふ伊家ゞ不身拵ゝの
伊立接も伊形ゝゝ今月八留ものとゝゞ

まゝこのよでは五の部屋中笑せ又富人ゞ子第四
うけあつく仕様扱ト申さるばらへ　歌　そりやをねるへく
はの命夜の内さうへでは出いのらひませうゞお金へ
已ゞたつて今連てゆくんとゆたまみばお重い帯丈来
かりて男へ出父とお柳の仲を関せーゞ後じく
その所へ花で出　〇若大人扱よくお出なさいまゝと
扱ふへあまでぐ申まゝさゞ子ふは命どのゞ小方とせうみ
うつゝねてのあんのかのと入うねおあのせん義ゞて

素てみへ男の働を長恵を丈ふまゝゞ人ゞ如の仕形や
定へゆのへらや　扱よまでもあゝと中　歌　〇さんく
言へせく、変べさあぐゞ方たゝと云うぬへ扱ふでなゝさ
の紙様ひあげく代年　皆丈三ゝさのへ雅ゞお
清ゞのふこと関ゞへうち数さとあり合きせるを扱
あゞるまの附八義へ見せより花でいで歌なつの
ふよ者つうとまゞり　〇「お後のえへ仕方　仕新しんや
さ友　生君もかうへ　まゝく　お様せ様せ様く

且那様にお留申さんと
くれたくひやうしませぬと云ひお宝の紙を
ふぐ〳〵と角へ呼出て声を望もなく云ける
八「お殿の立ハ広き世界の者にて
義理ある親子とあるべかさくひ様ひ人ッさく
お為ぐうどぐうまをう見れさるなりお湯りをう私をよし
あみ中に恋はせう何様云ッても人をうの逆髪史
兎も角も広間を通さまをまをくゆるりとお咄
るさまをさらるさるね中でも親子つく〳〵
まをまをうお知も和ぎ
まをせう　まをぐれてもおのんまりる　八「ハテサテ　兎ハ申
るへ殺しませぬ　「そんなるうそをさの云ふ今様を
親里へ泊るうう男且那ぐお湯りをう見の殿の申
みお前〳〵　紙咄くお呉れ和して二者ハ　八「今ッ方
乳母ぐんがお連中て何所へ様びよお出と兎申先
兎も角もあちらへと元の座よッて殺ちつ
八「唯今ちらくごしんぞ造申お咄我様　今日ハ

八藏

後家
於柳
思ひ
こがれ
向時
千代尼

半君の家作為り一ト先連くおゆりあきれ給くにて
第あされさうに動転のあるのあるべきらし
ちゆんまで安まさお中のこひ意び順女程ひのろんの
お座無ち〜つりゆもでぞざうませうナア大臣粥造
手拭あめぐへぞざいませぬゥト目つたで拘う
あらまさびお柳由夫と案〜てや 粥「おれも面
且もせ板中紙物もこと意が別きとのあぐへるーア
為り 為大人の口之後あふ程沢ぶやれも一ちうん

ご口水和あさうねば今者れ魏里へとるとしく今
ふもふ家が咽っさらゆ出の入縁よく咽〜咽繁へ
知紙設めると溶りよゆらうるどよ ぬぞきあく思
ゆるを之者も今お溶とそとら人拝びふゆ出る拝み設ぞ
知ぐく注ゆうあう背頁へせ老ゆう種よあく支養せ
あさうよい 主「ハイ為ることい為うまるが親父が立後
こうくさと中まるさら日注ゆう気のこぐうん
具和稼為ると張りよあらうゥと史ゲ若男で

ぞうきんト兎角涙ガ先ダセバ「柳」「気づかひ」なる
なたと人ニ命ガ何と云フも変ハ私の為ニ成
ラうあるも果く支度とあ「ハハく」罪うきさ
の為ニ云の紙ガ来ニ清のうきんも業ハ遠物ニ
ありきたく「右」ト「柳」も一帖ぎりお取ハ
者せきすと森ちるの者のガとうきせぬ人ニ
お客ハ十さいまく「流石」お金ハ病ひさんまだ
おとうぬニ右ガことの知ニかるまでも強く流ガ

ぬようとしるお柳ガこの為ニ結ぶもの云ハ嬉
附たるうハ柳紙歌たるハいれ「何とべく」
流ガのらうう無命とる紙きりく立流ニ一生
こうせるのやさしい事ニと持せゆうとかハも
已まガ可愛だうきりくうせうと云ガう流
ハるお重ガる紙ニ引ぎりゆうんと「ハ」ハる
紙お柳と八幡ハおくきめ「まづく」きたらく
お紙の果イも紙ガなるまで変するるしどうう

まゐらう　柳「サアく　おまへ早く　支度をサアくトせ給へ
ら且てく　浴さも　髪を　梳あげ　亜早く　和
紙あらくあらくもつてゐるあげ　首などくとい多ど
さ人そろくみの色ぬりよ　人いたがひよ　新紙え
合せてく　亮示と　笑まく　嬢たち　慧と　言声よの
ゐるあう　嬢「ふ巳弟どのゞ　湯ッさら　出状　ゐうよと
ゐや且トー　云ってこの家紙い色ぬりう。　柳ぐお　柳ち
八彩の　徠よあるまてく　云ってゐるハ　柳「新千人　多お　重

め紙　里方へ　中ゆく　ゐまえ　ばれ　ゐよ　ちるあのも　色し　屋
うう　ふ巳弟を　廻　出せば　とり　ゆ　亜さ　お　ゆ　い　具　粉
かゐうむ　見　抜て　おらまてぐ　ゐハト　指で　頬ぺた　突
つみバ　八彩　その　白紙　ゐゆと　揺り　八「お　生人さん
うも　鞠　どのく　ふ巳弟　ぐん　の　男　ゆ　みぐ　ゆう
お　紙ぐ　ありさう　ぐトい　人べ　お　柳い　男の　顔　ゐう
め　さう　ふ　野　ちう　亜ー　ふも　和　馬　油　亜　ゆ
たりぬ　ゆ　白粉　ハ　人　ッ　ゐ　ぬ　ゆ　面　よ　ご

敵と洞を[illegible]みうめ　柳「戦法でもあるまい
[illegible]れどつまり[illegible]の事紙[illegible]さんを振ッあどや
ある[illegible]人〳〵　公家元の何[illegible]えさやうなこの
[illegible]白イ　彼[illegible]を二[illegible]が[illegible]ある物ゝそんなようす
[illegible]も早く逃[illegible]ア風紙しでおるナ　八「あるさん
さ人[illegible]紙あゝ　ア風八[illegible]よ有馬屋[illegible]ア二番
[illegible]　柳「[illegible]ハ川[illegible]水も[illegible]
[illegible]ぞうゆま　柳「[illegible]も以前八[illegible]ゝ

[illegible]ハ「ヲット　皆[illegible]のたま人なたゝ人以[illegible]ゞ武[illegible]
でも級[illegible]紙合紙[illegible]るのよやなし　唯えんかんの絵
半　今ゆも見物ゞ[illegible]ゝ[illegible]ハあるさみ
あのそゞ[illegible]紙をゆり[illegible]ぞを[illegible]
[illegible]て十[illegible]ゝしやとおゝ人ざゑのおゝ十分[illegible]
[illegible]めさせる物よ[illegible]物[illegible]
ぶんゆ人[illegible]ゝ状[illegible]ハ[illegible]
と[illegible]ゝ[illegible]ハ代上[illegible]の上分[illegible]

遊出せハ「是ぐかん者ぐん要の物と耳よに書
きゆけバ 物「そんあらぬ被蒙入をぐ ハ「モン お聚ぐ
らいめりさる事をと云ツ お抑紙引書まとバ
物「ぐんぐ物でもこの屋中 ハ「是ぐ洗ゐさい
ゆりぐり お蒙きんい 猛ゐのぐ 物「よく多くゐ
理だりとまゐ多を 初たり多源てまぐよ 言のつ
鬼人らんとを一 附次のるりぐんぜゐけまバと言
ぐ行ぐ去まぐりみ 「お童ちゑん 味お人をよと 出泉

ハバ二人ハありて 発遊く 物「よく井くと 物ぐり
ぐどだりらんゐぐノウ お室きんハお蒙紙まくを
くんお出ぐりう 温室一く 表物を 拾びをとぐ 発せ
どまり せどこ 言ハゆりと 保巣のがんぜゐさワッと
だりみ 遊出せバ 物よ 長りー 乳母お 嗚 あハ
ぐぐーくをこ人 暮て 「場さ 又ゐりぐを 拾ー り
きりしく 保物 遊さ ハどちりくト 関バお 抑ハ 声を
初をあ ゐー 年ぐもゐみ 物 絵ゐ 抑 ぐりつ たんを

より帯紙一筋こう出し、「帯や今時さ奇りの
こうみぐらい二三貫ハ帰るまのおかけハ又一ト寸計
をつみて、業ハ見ハ御ゑ者あ、ぐ
ちよくく人ふ者く長ゑ、「ちよくく五銭うどぎ
いまこちよくく西ゲ三派お嬉ゑいう一生ほモシ
者ぢさん三六伯とい人地ぎわ人、「ちよハ伯ほ
織と言ッく中く ふる代品物ョう帯じゃ長
和ゲこうらとうみらわ人三ぢ嬉者紙こう三人わ人ト

小判一枚紙ふ初ひッく岩りうれバ「嬉おようふ
まバらくのふおま人さんまぢ、「伯のおめ人見ぢ礼ふ
ぢバものうそこぢおめ人よふ「嬉ゲあるトわぐうれ
更嬉ようせく○見まぢおりしとども又忠六のとこ
をうちく「和紙り「味方ふさ人ついく長るあう
伯のまりうう天忠のあまぢ糸自由ハきぢめ人ト
いふまく元来歌ふうたうぢのお嬉ハ沈ふしう
ふるとと紙やたくさうん

第四回

「醫るさ術の仕事をさいさぞや昭さ
ふうへ爲のあるごろとおもうん書うご
いふいいさ長ねの孫ごひ

夏「ヲヤいやる辻ちご　万「辻ちといへば私や中へ繼よ
義さんがこるへのごョモウ〳〵歩き暮る完よ私一人で考
へごと紙して居ると茶屋さんごちとお酒ふ飲く
長板屋敷ごョ今時分何人お出ごと

吹と子あの仕事が出来さうう持ッて来うんごと
云ふごう生長板屋ゲ風呂姿の中うう出ッさ仕事ひ
物ともうとも人ふく書ぶいのサ私やこ長紙蝋ふ濃
書よ書ますうといふと子屋ぶうぶう今ッうう夫濃
まで仕事く重取ゲあるのうあんでも書うといふのサ
効体ふいさ長ども云出ッさるふ中くきうふいう
生長板を引ッて来ると行も丈も拭ッくうう
書く書ういのサ全体私やちッてるうう二ッ書ると

ぶとくてく拵ゆがるへうらうでも　ゑまくみて
まずぐを長拵とのへニツ別くみるへく長生
長くッて常あんども高ぐ高くッて綿ぐ多分ぐ
おらいまよ結んで出る西へ別よ拵ゆうぐ縁ゆうで
付西とのへく点のうつ西へのへのサ常まちゆんと
メく結ぶことサア見うう保字の麻屋へ行うとのへ
うう今ッううぢゃア余まり悪へと云てる西の義を
見さのサ紙のう悪いのう赤まるへうう絶ると書よ

お金さんの西へ世相を作よ中く書うへ衣紋を
あうるとうう見ば分分作ッて紙衣紋を考と
ゑ見ば碧紙ゑ見て不義理ゑ書ゑ西へ
あのサ家紙ゑ作ッ中ゑ書とのへ長者さんあり
きるとのへ私ぐうう辻ぐ若者であうあへ西へ
為清うう口ぐ分ッけうう縫うくゑると猿坂さん
で例のきぐッ作のでよへッてる西へふる新へ長者
さんぐ来て作るとのへうう早く吸さうとかのへと猿

てんぐ　そなたよりつく　ぬらるのの　ぜ　うつ　間せうで　七ぜ
第四　さんを　ぬるゆ　ゆつく　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
とさうのつく　ゆ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
後を　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

様がまだお宅にお在の時分お嫡子の総領を儲けて
から新田義貞公にあやかつて後は尼将軍と言はれる程にお
成遊ばしましたがどうもおまへの気は人並の
夏「おまへの気をおさつしなされましたら左様に思召さずと眼が
ありましたらそれをいうてみて一ッ香のじやありませんか 万「至
穢らずが今日は破てゐるからお顔付に着せませう 夏「まア
いくや子の夜におまへさまと嫁さんの恋はさういふて上げませう 万「夫
ぢやお気がつきて来ませう 夏「又喰ツて口でもかへると出まし

あく抜たら折角お嫁アが待つて居るから口とそつちとも
えんぎが悪いから一ッ杯おいて居なさい 万「夫じや折角の盃
切をまあ是でもいゝからはやう子お手小女ちよつと納よ
嫁ので互が三味線を聞人おいて迷て夜にかゝるからとさう
云てお足をおいてめ是より酒を始めし折から梅子の
外より嫁さん今晩はと声掛るは是も芸中一流の貞
婦小金といへる仇者なり 万「ヲヤ小金さんおいでな 金「小万
さんかへ 万「アヽマアおいでヨ 夏「小金さん素見のかへヨモウ

二度愛も仕てお出ざらう金ばかりのうけると毒ぢゃよッて ひとに
ゆめてお出なまづい物もたまみや茶ぢゃを代り 波物心も
出て上やうの子 金「そんなら一寸宅へ往て来る
せう 夏「史ぢやまこ実ゑおらもヨ 金「アて 油ぢやうやんしておりヨト
あぢや 久 ちゃ 万「小金さんハかんちんッ子へ微よく出まを
足ゑゑ絵りおり
れ人 夏「さうサれ人ゑんつッ下も年がいろゑのいろ 地ぢぶ肉
端ぢろ 長ゑのこと物ぢも 知ろゑの人ぐ多いろ 助
美連の知ゑたぐ多いのサ 史ふ心ぢ子 私の肉のゑん

そバ順女 夏のろの ろくゑ物のゑ出 毒ゑの癖よ 産愛代とゑ
さんだん出りして ゑるのサ大概どのろゑのとゑ人こと人肉ゑ
ゑても知まるハ子○ 法 のろもふ小金八年ゑ弟ゑ知て来ゑ
金「 婦さん呉ろハ 夏「ヨヤ 絵ゑ出ぢ子サア およろ 万「私や乳
ゲ 外ゑんぢぶ ゑッ毎ゲ 足人ゑのハ子 夏「ナニ今 秋ハ家ゑ絵ゑ肉
産と毒ろゲ ゑると言て今ろ ぢて出ぢ子 万「 ゑ絵ろ人
夏「サア小金さん一ッ ゑ書 さぢ くさゑ紙ゑ ぢろゑ物ゑの
嘆紙ゑ ゑろ 金「 ゑりぢぶ ゑ出ろ 深山ろ ろく

なさへヨ　万「悪く言ふ人ぢや京の町にハ経を言ふと
申すと言て悪く言さ人サ　金「ヨヤマアおまへ人ぢやアある
まへし　夏「夫ハそうと昨日こそ紀今日笑はるゝが
お主人ハおら引込ぞと子　金「誰がそんな事を銭言ましたヱ
夏「誰だッけと思ふらく老人さらく井佐の銀さんサ　金「
ヨヤマアお相も左く懸けるそんな事も言ましたッけが其人さん
も私につゐちやア何ぞのとお金を借て下さいまし
借金まで掛ッて貰ッちや其人さんハいつに志さ下さるが親切

だの何ぞのと肩入も甚し長い年季でもありません
から精出して年季勤めて借金自分で片付て夫から
の了簡に仕やうと思ひますハ　万「真実におまへハ感心サねへ
夫にしても浦山しいハ私なんぞハ一生女房にやなれまいと
いつそおまへの云ふ通り丸で世帯になつて一生暮すのも気の
毒なりいつ迄がよせるもんぢやア女房ハ　夏「夫だ
云やア私がいつ迄がよせるもんぢやア女房ハ
なんでも思ッた人と一生別れるもんでさん　なけ

アラヤマア皇と考て、亜のサ　金「酒ぬ先とを多を厨、
とやうで一旦とをよ多つさうみやア老い修ハらうひ
ませんうう者さんの方由よし婦さんの方もら婦よ
ちく自あふ敵とも婦よ切平も考へのサ　夏「お夫人の
やうを知をぞうう　切拓しても赤ハらく和人稲田屋の
用ぢや　小金の抱へ主人　お茶の来さのグ稲の祈グ旅迄ぎやう
多ものぞハ　金「ぞうしらく　婦の喜さ人生とちうあへ
時ぐうう婦さんの骨折で一人あふハ命までたうー！

ぢでもてうやうふ仕込で貴ッうんでそうう阪師さん
あり主人あう　俺よ多や　ちませんとあくを鄭元小金の
むお夏小方ろあそやしかうみよ屋を修う金野うう
第四しの源七ガ　源「小金さん多渡　金「アイト迄ら四」て
門口人切ば平よはよせ行ちます　金「そん多う四人俺ぐを
ふ亜と出来うの　接うふ考ッけうぞうう子　源「料理
素屋うう　切紙ろみませうう　金「お茶屋ぢやさがちち
分多ちうりけ多やす　源「支ハ今夜ふ多源ちません

おもの人手
なるれ
印地の
金つぶて
嵐雪
お夏

小万
小金

やゝ何時でも出来まさア　今「アレサ太郎どやあへやゝ哉
もろく出来ることさハ子で解くきさと思ひたきと
ざアる。此お人のこそく哉　「ア成お夏ハあく笑ろく
夏「一寸小金さん何ごへ来さのく　今「ハア　夏「何ごと　今「新
屋のおでさんの所ふかるのでもが内が出みろうござへ
半ろろサ　夏「夫じやきさるくッてもよりやゞ変へお呼る
今「どういろて結様でもそれども　おさの毒さ　夏「どう
せ二階があへるろう　今「そんるろお形ひヤきを源七

さん表人来る中うみたら出て伝てお呉みさましと子ト又も
身よりを書てさ中く　源「ハイく畏り
中ろさト逃ろりそろく見早みわべ極ろく表ニハ何ろかろ
ね何ろ見ども悪べ悪酒のそろるみさハ表をつむ紙冠り
かの源七ガ表人のごろく　怪るやと出し裏ハ戒ろと明
見べ小女ガ声を初ちめて二階へ指戒さ　「小金さんガ
汚てお主でござハ半ろ　「大ろふお女まろ帰きんみ
早くと　紙へより一分銀一リ　二階のほより小金へ新戒出

早くくとる拾ひだまを見て喜ぶ二階へあがる　「ら
俺居ごのう丈夫の奥の方より二人り斗りあとゞぢちもい
ぶ手間より座敷居でかと新のかを面白あい凄い美人
ごの　金「アレゲ小方さんサ洗ひ髪でみるのゞ夜のお裏さん
「アレゲ小方さんの義姉あるのの　金「おまさん来るさう
ゴヨ一昨日の夜紙屋も尚分用ゲあて出らるあいあんぞ
とりくよとして　形や例よ居やア来ぞ約束も知らあい
ろゞぶ知よ形とゞあるのるも知とやア来るの　「ぶ

ねくと銭言みさんる呉いろくと云て来さんゞアみよく
拍を考くこ正ねく人のカや提拍ゞらくと云ても初まる
稼人ゞ正るも自分の拍あるく義まめくとろ盗まれめくとろ
大ろゞみまる気よあるのゞ人情ョまて頂ぞ考らぶのかお
のゞありつまろねく片身のゆうみ着よ独毛おと居さぶ
み居て居ると外の円ぢや絲んでらア　金「人とらかゞみか
ひゆくみたョ猫ゞ猫で中ゞぶらまるョト洞ゞんで伏
向くある　「ヨイ小金さん約も法ぶ方くゆみ代絲居中

戯ハ彩り人中の者ざいる機姫を率ねへョライョウトふ
金の孫をゆきぞる　金「何も後をたちやア者ませんそれ茶の
ゆを云ても止ぬあいとそッて余り人を森よ多るうッサト荒糸
第人　金「中ッく笑ひ新成ア者ハさうと成るうう咲ま者り
ふく引込で完屋でもあらうそれどあ一の内ハ安い人ッそ
茶孫の男中ハあッく主西人往ッそんを清ゆやら
親元をとうらへく世間成ひとく主派よ男ハとあのハゞ
ぞう生る接うゞ　金「きうくつ怪いらひませんゞあすとの

女房ハ以あゞ嗅女ゞと一生主名ゞ利口なおまへ
ゞ安くうそう主て伺うゆつゆく有分ゞせまらうとそふと
て毛きうで多うるハゞ息のあるハ内ハそひきう主ゞらつそ
私ゞ死ゆでもちうく浪歩ゞ多ゆ孫ゞうーを主派ゞお孫ゞ
主主中うとそふと内食のこううあハ一番さそへ死ふハ
トふうとうとうばを一本
男おゆひの切るハかくあゞきを懐の主ゞを西主
主ハとも喝へ者ッちやいやゞの聴主紙へ御を主

くみ及びて染色りまるめ今八百く世苦八百の數
まゝ多くかるたゝう多たゝ竹卑の巻も皆ものぐく善洲
すゝめ惡成こゝまもの條のを新向むゆとハゐ人世
巳ゝ成筆より出丸ぐく書の長浪多れバよた
み奇ゝく續四人うゝ狂氏赤人の眞浪八二條の
ゝどめみ分解と書り

春色戀廼染分解中之巻終